

いきいき農業高校 第16回

北海道真狩高等学校



一 地域の概要

(一) 真狩村の概要

真狩村は北海道中西部にあり、洞爺湖の北、「えぞ富士」と呼ばれ親しまれている羊蹄山の南ろくに位置し、農業を基幹産業として発展してきた純農村です。

主要な作物は、じゃがいも、大根、人参など、中でも食用ユリ根は、全国一の出荷量を誇っています。さらに近年は、ゆりの花のフラワーロードが代表的な景観の一つとなり、地元の食材でもてなすレストランや道の駅、羊蹄山の湧き水、地場産の豆腐、ジャム、パンを買い求めのお客様が訪れるなど、農村の良さを楽しめる観光地としても知られるようになつてきました。

本校は、創立七四年を迎える歴史の中で「我が村の高校」として、地域の期待と要請を受けて教育内容の再編と充実を図り、地域と密接に連携した農業高校のモデル校として先駆的な教育の成果を上げてきました。

(二) 真狩高校の概要

農業の六次産業化が叫ばれる中、生産者として農作物の栽培だけではなく食品加工、調理などの技術を備え、販売に至る系統的な学習活動を通して「農業と食」のスペシャリストを育成することが重要なコース」「野菜製菓コース」が地域特性や時代背景に応えるものとして導入されました。現在、「有機農業コース」では、野菜・作物の基本的な栽培技術の習得、ロボットトラクターやドローンを活用したスマート農業、有機JASやGAPの認証取得に取り組んでいます。「野菜製

「菓コース」では基本的な製菓製造技術の習得、野菜を活用したスイーツの開発・販売、各種コンテストへの挑戦、三年生では製菓衛生師の資格取得に取り組んでいます。

「うつした取組に対して、真狩村をはじめ、地域の関係機関のご支援ご協力を頂き、生徒一人一人の知識や技能を育む教育活動の拡充を図り、特色ある温かい学校づくりを目指しています。

二 実践概要

(一) 有機農業コースでの取組

■ 有機JAS認証取得への取組

観光資源に恵まれたこの地域には、国内外だけではなくインバウンドで来る外国人も多いのが特徴で、外国人の中にはオーガニック食材に関心が高い方も多くいます。このため、平成二五年度より学校農

場において、ホウレンソウの取組が始まっています。昨年はトマトやミニトマト、サツマイモで有機JASの認証を取得しました。収穫した農産物は、道の駅や地元のお店などで販売するほか、菓子の原料として使用するなどし、好評を得ています。

生徒は授業を通して、専門的知識や技術はもちろん農業生産や地域の消費ニーズについて学習し、農業に対する興味関心を深めています。

■ GAP認証取得への取組

GAPに取り組むことで、わたしたちが口にする食品の安全や、自然環境の保全、生産者の労働安全や人権の保護に配慮し、将来的に持続可能な農産物の供給の実現につながり、世界共通の目標である「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成に貢献しています。

また、農業生産物の輸出促進により、

海外への輸出には必須となるGAPが生産現場に求められています。

本校では令和二年度からミニトマト、トマトでJGAPの認証取得に取り組みました。本年度も授業や放課後の学習会



JGAP認証取得のための学習会

や模擬審査会を経て一〇月に公開審査会を実施し、審査員からは是正項目が示され改善報告を行い、認証取得となりました。生徒たちの経営改善の学習は、学校農場の合理化や整理整頓など農場環境の改善に繋がりました。「GAP」は農業學習の中でも特に教育効果が高く、今後も継続した取組を行います。



経営改善の学習



I C T 利用の農業技術講演会

■スマート農業への挑戦

ロボットトラクターとドローンが令和二年度の農業機械等導入事業により、本校に導入され、スマート農業への取組が始まりました。

昨年度下旬にI C T利用の農業技術の講演会が行われ、道農業近代化技術研究センターから講師を招き一・二年生がス



ロボットトラクターの自動操舵体験

マート農業の現状について理解を深めました。聴講した生徒は「スマート農業の現状について動画の説明があり、分かりやすく、今度の農業利用が楽しみ」と講演についての感想を述べました。

六月下旬ロボットトラクターの自動操舵体験を行いました。機械メーカーの方が講師となり実演講習と映像講習を行いました。実演講習を受けた生徒は「操作

や直進がす「じく簡単で驚いた」と感想を述べました。このように、実習時の体験により興味関心が高まり今後の農業課題を考える良い機会となりました。

傾向にあります。

■各種コンテストへの挑戦

(1) 野菜製菓コースでの取組

■製菓衛生師取得に向けた取組

多くのパティシエが持つ国家資格で、この資格を取得することで、栄養や衛生、菓子の作り方など、幅広い知識を持つ証明となります。本校では平成二十七年度から資格取得に取り組み、高い合格率を維持しています(平成二十七年から令和元年まで一〇〇%、令和二年八七%、令和三年八八%)。

野菜製菓を学ぶ生徒の進路状況は、就職・進学ともに製菓分野への希望が多く、高校での学びが生かされています。また、新コース設立から七年が経ち「パティシエ」を目指し入学を希望する生徒も増加

七月のパティシエロワイユアル「O-OI」本選大会に本校から二チーム(二人一組)が出場し、一チームが最優秀賞を受賞しました。北海道の食材を使って、一三校から三チームが出場し、一次審査を通過した一〇チーム七校が、本選のオンライン大会に出場しました。

当校は各出場チームの作品を応募書類のレシピに基づきセイコーマートが制作し、審査員が試食したのち、各チームが五分間のプレゼンテーションを行いました。出来上がった作品は「クリームたっぷり! ハスカップのまんまるクッキー シュー」と名付けられ、審査員による試食では「ハスカップの酸味がマッチしている」と高評価を得ることができました。作品は、全道のセイコーマートで九月下旬から一週間期間限定で販売されました。



「パティシエロワイユアル2021」
本選のオンライン大会

また、一〇月に行われた「パン甲子園 inいわみざわ」の本選大会に一チームが出席し、グランプリを受賞しました。北海道各地から一次予選を勝ち抜いてきた六校九チームの高校生が、それぞれの地域の特産品を生かしたパン作りを二人一组で競い合いました。今年の審査は、オンラインによる五分間のプレゼンテーションのみとなり、三人は、プレゼンテーションで、パン作りには欠かせない水や素材についての思いを発表しました。水は羊

蹄山に降った雨水が長い年月をかけて湧き出した「羊蹄の湧き水」を使用し、辛みが少なくほんのり甘いタマネギ「空知黄」を生地に配合しており、手製の紙芝居で作り方を紹介しました。パンは「空知黄とキタノカオリのチャバタ」と名付



空知黄と
キタノカオリのチャバタ



「パン甲子園 in いわみざわ」
オンライン審査でのプレゼンテーション

け、もかもかとした食感のパンに仕上げました。

審査員からは、「プレゼントーションに工夫がみられ、紙芝居のようだとでも良かった」との講評をいただきました。

各種コンテストへの挑戦は、生徒の主体性はもちろること、生徒同士の対話的学びがあり、学習の深化を図ることができました。

(II) 地域産業・地域人材と連携した授業の取組

一年生で未来の農業従事者を育成し、日本における将来的な大豆の自給率向上を実現して豊かな食文化を残していくこと、生産者と実需者の結び付きや関係性について体験を通して学び、六次産業化への意識を向上させるなどを目的に、未だ一〇〇粒運動 for High School」に

ジュニア豆腐マイスター認定取得のための外部講師による講義



取り組んでいます。

プロジェクトは、生徒が年間を通じて大豆を育成し、その大豆を豆腐製造業者が仕入れ、「豆腐として商品化するものです。並行して、生徒たちはジュニア豆腐マイスターの認定取得に向けた講義を受講します。ジュニア豆腐マイスターは日本豆腐マイスター協会が「豆腐を通じて豊かな食を未来に継承すること」を理念に、豆腐を使った食育活動のできる人材を育てるべく制度化したもので、全四回の外部講師による講義を受講した上で認定されます。

(四) 地域小学生との交流を通した授業の取組

■ 地域小学校とのダイズの交流学習①

(枝豆収穫)

播種から豆腐作りまでを行う全四回の連携学習で、五月に予定をしていた第一



枝豆収穫

回田の大豆の播種は中止となつたが、第二回田の九月の枝豆の収穫はマスクを着用し高校生と小学生が一緒に枝豆の収穫に取り組みました。高校生は身に付けた知識を生かし枝豆の収穫方法を教え、児童をサポートしました。収穫を終えた児童は高校生の案内で農場を散策し、ハウスでは有機栽培されたミニトマトの試食なども行いました。その後、採れたての枝豆を生徒、児童で試食しました。

高校生徒と小学生がペアを組み、高校生が収穫した大豆の選別方法を教え、一緒に作業を行いました。乾燥した大豆のさやから丁寧に大豆を取り出しバットの中に入れ、袋詰めし、テープで結束しました。

最後に、本校で収穫したジャガイモを



大豆収穫

■ 地域小学生とのダイズの交流学習②

(大豆収穫)

皆で試食し、選別した大豆を児童にプレゼントしました。

交流し、学習で得た知識をアウトプットする上で、生徒の主体性はもうろん対話的で深い学びから知識や技能の定着につながりました。

(五) プロジェクト活動による

地域との連携



パンの製造・開発



サツマイモ栽培プロジェクト学習

(六) 地域での販売会



道の駅「真狩フラワーセンター」の販売会

「道の駅真狩フラワーセンター」で年に数回行われる校外での販売会を実施しました。新型コロナウイルス感染症の影響で実施できなかつた販売会ですが、昨年七月に約一年ぶりに再開しました。当日は多くの村民の方が訪れ、大盛況となりました。野菜製菓コースの三〇名が交代で販売し、最初は緊張していたもの

の、慣れてくるとスムーズに会計や袋詰めを行つことができました。この他にも、

後志教育局で行われたキッチンカーフェ

ステイバルや公民館で毎年恒例のクリスマスケーキ等の販売会を行いました。

販売会は消費者ニーズの把握や接客マナーを学ぶ良い学習機会となっています。



公民館でのクリスマスケーキ等の販売会

四 学習の成果と今後の課題

得を図る必要があります。

- よう多くの生徒が、コンテストや各種プロジェクト活動に挑戦し、探究的学びを推進する必要があります。

五 おわりに

七二年の歴史の中で、地域の農業や担い手の育成に関わり地域とともに歩んできました。今後も地域のニーズに応え、地域に貢献できるように新たな取組にチャレンジするところで魅力ある学校を目指していきます。

- 地域の外部講師と連携することで、地域の実情や取組について理解を深めることができます。将来に必要となる資質や能力を身に付けることができました。
- 田頃の授業で学んだ知識・技能を異校種間連携による交流の場面でアウトプットすることで、学びを深め知識や技能の定着につながりました。

- (II) 今後の課題

執筆・写真提供は、安彦勇一教頭先生（現・北海道美幌高等学校）にご担当いたしました。

- 地域産業や地域人材との連携をより一層充実させ、幅広い知識や技能の習